

だんざぶろうむじな【団三郎貉】^①ふたついわさん【二ツ岩さん】、ふたついわだいみようじん【二ツ岩大明神】

新潟県佐渡市相川下戸^{おりと}にある二岩神社^{ふたついわ}に祀られている貉（貉とも）の名称。拜殿の奥にある二つの岩の間にある穴を住処としていとされる。

安永年間（一七七一―一七八〇）に書かれた『怪談藻塩草』にいくつかの伝承がみられる。滝沢馬琴が『燕石雜記』（文化八）で紹介した。柳田国男も隠里や椀貸し伝説への関心から言及している。

島内各所に一〇〇以上祀られる貉神の頭目で、東光寺の禅達、湖鏡庵の財喜坊、おもやの源助、関の寒戸^{さむと}を四天王として従えているとされる。その妻は新穂高橋^{にいぼ}のおろくで息子が財喜坊、鶉掛の長老と関の寒戸に嫁を出しているという。明暦三酉年に越後商人団三郎から貉を購入したと『佐渡奉行代々記』に記載があり、桂の伝三郎からつがい^{つがい}の貉を譲り受けたとの伝承もある（「高志路」一九三、昭和三六、八）。金山、銀山でもちいる輔^{すけ}に使う毛皮をとるためという。

【事例】①佐渡国二ツ岩（新潟県佐渡市相川下戸）「団三郎は、人に金を貸していたが返さないものが増えたので貸さなくなった。伯仙という医師に治療を受けたことがある。兵火や洪水により埋もれた金を拾い集めてためた金を礼金として支払おうとしたが、受け取りを拒否された（滝沢馬琴「燕石雜志」『日本随筆大成第二期』吉川弘文館、昭和五〇、四八四―四九二）②加賀の国（石川県）上方見物の帰り、団三郎は、加賀様の行列に化けるから駕籠に声をかけるように狐に言った。行列

は本物であり、狐は首をはねられた。佐渡に渡ろうとした狐を団三郎は騙し討ちにしたのだ（『新潟県史 資料編二三 民俗二』昭和五九、九〇八）。

③新潟県佐渡郡相川町（佐渡市相川）「明暦年間、酔って道に迷った佐渡奉行所の役人中沢某の道案内をした。提灯を持った男は、「わしの親方は佐渡の国の始めからここを住み家としているが、神として崇められていない。世話してほしい」と請うた。中沢は団三郎の住処を十二権現の末社とし、自ら職を辞して神主になり名も出羽と改めた（佐渡郷土文化」一四、七四、昭和五三）。④佐渡国河原田城（新潟県佐渡市金井新保）鎌倉時代末期、狐と術比べをした。狐はみごとな嫁入り行列をみせた。団三郎は、三日後に大名行列に化けると約束し、奉行に化けた団三郎の肩を叩いて賞賛するよう狐に頼んだ。本間の殿様が河原田城新築検察のために行列を出すのを知っていて狐を騙したのだ。狐は捕縛され吊るし斬りにされた（澁谷徹「貉の島」『島』一誠社、昭和九、一九二―一六）。④新潟県佐渡郡両津市関（佐渡市関）「昨年、五、六〇の背広の男と和服の女が神社を訪ねてきた。「今日こちらに二ツ岩さんからお嫁入りがあったのでお祝いを届けに来ました」という。持ってきたのは酒二本、ブリ二匹、赤飯のパック四つだった。皆で食べようと出刃を研いでいる間にブリは消えていた（梅屋潔・浦野茂・中西裕二『憑依と呪いのエスノグラフィ』岩田書院、平成一三、五三）。

〔参考文献〕山本修之助『佐渡の貉の話』昭和六三、佐渡郷土文化の会